



TITLE:

<批評・紹介> 宇都宮清吉著「漢代
社會經濟史研究」

AUTHOR(S):

河地, 重造

CITATION:

河地, 重造. <批評・紹介> 宇都宮清吉著「漢代社會經濟史研究」. 東洋
史研究 1955, 14(3): 235-241

ISSUE DATE:

1955-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/139046>

RIGHT:

批評・紹介

漢代社會經濟史研究

宇都宮清吉 著

一九五五年二月 弘文堂
A5版五二五頁、一三〇〇圖

近頃のように新しい研究の通讀においまわされていると、特別なもの以外はじっくり讀みなおす暇がない。しかし個々の研究はいずれもなみなみならぬ蓄積と努力がそそぎこまれていたのであって、一べんの通讀で底まで讀みとることはむづかしい。その意味で既發表の論文がこゝに一冊にまとめて出版されたことは、古雑誌をひっぱりだす手間が省けるという以上の意義がある。そればかりでない。こゝに收められた過去二十年にわたる研究は、あるものは大はばに、あるものは舊稿をそのまゝ生かしながら補筆改訂されたのだが、これを一冊の書物として再讀してみると、著者独自の研究態度や體系的な構想が明瞭に浮び上ってくるし、またこの間の學界の進歩のあとや、あとがきにもあるように、はげしかった二十年にわたる日本人の生活の波もすみずみにうかがわれる。少し誇張していえば、この書物は人間的にも著者そのものといった感がするのである。

しかし論文集がこのような感銘を興えるためには、まず歴史の追究を支える問題意識が、一貫され發展させられていなければならぬ。センサク趣味やディレッタント的態度から生れた論文集は、畢竟寄木細工にすぎなからう。問題意識がどういふ性質のものか、またそ

れが論文の上にナマの形ででているかどうかは別として、それはいつもわれわれが現實に直面したところから生れてきており、そしてたえず發展する學問の體系をいちばん奥深いところで支えているはずのものだ。それでは著者の業績を支え、この書の全篇を貫いているものは一体なんだろうか。一言でいうならば、それはヒューマンなもの、のあくなき追究だ、そしてこれが著者のわれわれを惹きつけてやまぬものだ、とわたしは思う。第一章「東洋中世史の領域」の冒頭には、「現代人は現代の世界が、一つの轉換期にのそんでいることを深くさとうとしてゐる。それを人々は、原子力の利用法が見されたという事件によつて、いゝ現わそうとしてゐる」という一節がある。歴史學は危機の學問だといわれるが、轉換期に立つた人間は、未來の人間性にみちた生へ希望をもやすとともに、自分が過去にふかくつながっていることを自覺して歴史に眼をむける。著者のヒューマニズムはかかる場に立つて歴史の追究にそまがれているように思える。なお第一章で展開された西洋的近代世界の危機・没落とその超克の意識は、この論文の掲載された「東光」第二號が戦後のみじめな混亂期のさ中（昭和二十二年五月）にだされたこと、そして東光第一號の卷頭言や、第二號の平岡武夫氏の論文、あるいは第三・四號の桑原武夫氏と平岡氏の往復書簡などにみられる基調とも深くつながっているものであらう。この危機と超克の意識は、當時の東洋學者のパッションをかきたて、古い東洋的世界の新たな認識へと立ちむかわせた。こゝには東洋學の新しい發展の芽がふきだしていて、それが著者においては、著者自身がつちかわれた内藤史學に對する、とくに東洋史時代區分を通じての批判と深化となつてあらわれているように思える。

このような視点から、第一章に展開された著者の大きな構想についてふれておこう。この章は、秦漢時代を古代の完成、中世のテーゼ、六朝時代を反テーゼ、隋唐時代をシンテーゼとする中世史の領域を設定し、内藤博士の廣い意味における中國文化發展の歴史という東洋史の定義を首肯しつつ、あいまいな過渡期の概念を整理し、中國文化の側からのみとらえられた外民族との關係をふかめてみなおし、この定義と時代區分の深化をめざしたものである。そしてこの深化は、一つの完結（それは「人格」に比すべき「時代格」という言葉でとらえられる）は同時に次の發展をふくむという、著者の辯證法による東洋史の發展史觀にもとずいている。著者によれば秦漢時代の個性、時代格は政治性という言葉で表現される。しかしそれは單に政治の優越性ということではなくて、家族倫理を中心とした民の生活にもとづくモラルが、儒學という體系をおして、天子に發する一元的な法家的政治力にはたらかかけ、儒家的、法家的政治として完成したことを意味する。ところがこの完成は、内面におけるモラルと文化の硬化・形式化をもたらしした。政治は豪族の學問と化した儒學をおして豪族の手にうつってゆき、政治も民もかれらの手で分割された。かくて秦漢時代をつうじて發展してきたこの動きは、六朝時代に完成をみる。すなわち豪族の自立自存性、經濟の孤立と地方化、個人的創造性にみちた文化・藝術などに表現されたこの時代の時代格は、生氣ある自律性という一語につきる。つまり專制社會の中にいきすく民・豪族の生活とモラル、そこにあらわれるヒューマンなものと、その歴史的なすがたの探究、これが著者の視角であり、この基調は全篇を貫くものだと言つてよいと思われる。こゝに東洋史を廣い意味での中國文化發展の歴史とする内藤博士の

定義を肯定する著者の立場があるのであろう。さらにこの「廣い意味」という言葉が、新しい補筆によつて、それは文化の發展とその基礎たる社會經濟の發展の相互のはたらかかけを廣くふくめたもので、支配階級と被支配階級の不斷のたたかひの過程に生みだされてきたものだ、と定着化されていることも眼を惹く。

この時代區分論に對する批判は、前田直典氏などによつて行われてきたから、くわしくはのべない。ただ、歴史の發展とは、何がどのように發展するのか、その發展をうみだす力は基本的にはどこから生れてくるのかという點から、著者の東洋古代・中世史の把握がもう一度検討されてよいと感じたことはふれておきたい。端的に言えば、ヒューマンなものの歴史的な在り方を、一體どの視角からとらえたら、歴史はもつとわれわれにいきいきと語りかけるか、ということである。古い東洋的世界は西洋近代世界の中に解體してゆき、その西洋近代世界もいまや過去のものとなった、と著者は言う。それでは古代から發展してきた東洋の世界は、いまわれわれの眼前に進行しているアジアの新しい發展とどう結びつくのであろうか。それは解體から誕生してきた「國民」の歴史としてのみとらえるべきものなのか。それではわれわれの東洋史の研究の「未來にのぞむ立場」はどうなるのか。さきにふれた戦後の「東光」における近代超克論もいまみると、近代の否定が古典シナの探究にむかうとき、そこに何か飛躍があるように思えてならない。わたしがとくにこの點に注意して著者の見解をききたいと思うのは、著者の歴史把握と立場がこゝに深くつながっていると考えられたからにほかならない。

× × × × ×

さて本書の内容は次のとおりである。(カッコ内は舊稿の發表年)。

- 第一章 東洋中世史の領域 (一九四七)
- 第二章 古代帝國史概論 (一九四一)
- 第三章 西漢時代の都市 (一九五〇)
- 第四章 西漢の首都長安 (一九五一)
- 第五章 史記貨殖列傳研究 (一九四九)
- 第六章 續漢志百官受奉例考 (一九四〇)
- 第七章 續漢志百官受奉例考再論 (一九五一)
- 第八章 漢代蒼頭考 (一九三五)
- 第九章 僮約研究 (一九五三)
- 第十章 劉秀と南陽 (一九五三)
- 第十一章 漢代における家と豪族 (一九三九)
- 第十二章 世說新語の時代 (一九三九)

このうち一、二章はいくまでもなく總論にあたり、三章以下は各論である。各論の一々について詳論することは紙幅が足りぬので、簡単に紹介していこう。三章以下は一見してわかるように大體四のグループに分けられる。まず三、四、五章は、完成されゆく古代帝國の經濟的側面、とくに社會的・地域的分業と華北を中心とした巨大な流通圈——世界經濟圈の形成を研究したものである。このうち三章は牧野巽氏の研究をうけて書かれ、この經濟圈における流通と企業を都市の實態を中心に解明し、四章は視點を長安にしぼって、その實態と性格を究明したものと言えよう。長安は大帝國の首都たるにふさわしい世界的な都市であり、大流通圈の一の中心であったが、それと同時に、「觀念的な考工記式アイディアに一致しない」都市でもあった。すなわち儒學が豪族の學問となり、法家的・儒家的政治が

完成された後漢時代の學者班固からみれば、「不徳な政治的軍事的にしてかつ世俗的な都」であり、秦帝國の傳統がいきのこっている法家的現實主義、實務的精神の表現であった。それ故にまた武帝の時代を境として、リアルで自由な商人の世界が表えてゆくとともに「欲望と暴力と貧乏と罪惡のうすまぐ都市」として生命をからしていった。そこで五章はこの生氣ハツラツたる西漢初期までの商人の世界を、史記にみえる司馬遷の思想と經濟學の中にみたものである。司馬遷のリアルで自由で人間性にあふれた思想は、この商人世界から生れてきたものであったから、かれは商業の社會的・道德的限界性をみとめつつも、この商人世界を政治から獨立して侵されてはならぬ世界として強く肯定した。同じ世界から出ながら政治の優越を主張する桑弘羊に對する批判がこゝから生れてくるし、土くさい農村に足場をおく階級的な賢良文學の重農主義との相違もみられる。司馬遷はほろびゆく世界の最後の輝きを示したのであり、史記と漢書のちがいはこゝからも明瞭となる。

このように西漢の流通經濟に關する研究は、もっぱら著者の秦漢帝國史の構想にかかるところであつたから、當時の商品經濟の基本的な性格についてはふれるところは少い。しかしわたしはこゝで、はなはだ素朴な質問を提出しておきたい。それは武帝の政策によって、それほどさかえた民間の商工業があまりにもろく没落したことにについてである。著者がたびたび據りどころとした臯錯の上奏は、當時の商業がもつ奢侈品商業性と投機性をよく示しているようにも思われるのであつて、商人世界の自由で人間的な明るさは、專制社會の中でわれわれの眼をひきつけるのだが、反面、その本質にねざす暗い翳のあることも、みのがすことはできない。このことは商業

が農村經濟と農民經營の再生産過程にとれほど根をおろし、社會の發展をささえる役割をはたしたのかという評價、また商品經濟に對する專制國家や豪族の機能といった問題にもかかわる。もちろん大消費都市の周邊と遠隔地、あるいは地方的差違も問題にならう。この點は著者の狙いとするところではなかったかもしれないが、商品經濟の歴史的な分析は、著者の全構想にもかかわる重要な問題であり、この點に關する藤井宏氏の指摘（東洋學報三六の一、新安商人の研究（一））は重要だと思われる。

第二のグループは六、七章である。六章は續漢志にある受奉例を校勘し、さらに延平中の月奉支給例と比較して、月俸は「半錢半穀」でなく「七錢三穀」だと結論したもの、七章は楊聯陞がこれを批判して、「半錢半穀」の原則はまもられていたとしたのに反論したものである。著者は九章算術によつて、粟用のマスと米用マスという二種のマスがあつて、これが正しく用いられたならば、その斛數は粟であろうと米であろうと實質において變らないとしたが、それでは居延漢簡に大石と小石がわざわざ併記されているのが不可解となる。この點からいうと楊説も強く、正否はにわかに定めがたい。この點については米田賢次郎氏が「居延漢簡とその研究成果(2)」(古代學三(二))でふれているので、それにゆずりたい。

第三のグループは八、九、十、十一章、すなわち豪族と農民家族、奴隸などに關する一連の研究である。十一章は戰前のこの方面の代表的研究の一で、今度の改訂で、とくに「五口の家」に關する守屋美都雄、牧野巽兩氏の批判の解答として、三族制家族の理念と實態とがのべられていることは注目される。しかし漢代社會の骨格ともいふべき豪族については、豊富な資料でその輪廓は明かにされたが、

内部の構造と性格という根本的な問題はのこされていた。戰後に發表された西嶋定生氏の研究は、この點學界に衝撃的な影響を與え、それが九、十章の研究となつて結實した。九章は興味深々たる王褒の韻文「僮約」の研究で、テキストの吟味、多くの古韻研究の成果を利用した校勘、著者獨特のセンスにあふれた邦譯からはじまり、「僮」すなわち奴隸の問題をめぐる、著者が上家下戸制と名づける豪族的生産構造論が展開され、つぎに「約」すなわち證文形式から僮約を検討し、「奴隸といえども自己の運命に關する發言權と承認權をもつ」という法論理と、その表現としての「賣買文書に自署する法習慣」の存在を假定して、この何人かが承知している形式論理があつたればこそ、この「僮約」に示された證文の内容との間のギャップが、人をオカシがらせ、この文學の諷刺性を成立させるとしてゐる。それ故僮約は完全な意味での奴隸制社會というより、もっと人間的な社會と人間觀に基礎をおくものとされる。この章はさらに「僮約」の地理的舞台としての四川地方の經濟と、莊園經濟の具體的なすがたに論及しておわる。僮約を文學性の面と社會的經濟的資料としての面の交錯した場でほり下げたあたりは、著者の本領であり、すべての力をそそぎこんだ大作と言うべきであらう。またそれだけにこの研究は多くの重要な問題をなげかけており、二三の點は最後にふれることとして、こゝでは西村元佑氏の書評(史林三七(二))や五井直弘氏の書評(歷史學研究一八五號)にゆずりたい。なおこれにつづく十章も、劉氏侯家の系譜、所領、收入からその性格を、南陽地方の經濟的發展と南陽豪族社會の中で明かにし、劉秀の社會的經濟的基礎を具體的に分析した好論文である。

さて最後のグループ、と言つても十二章一つだが、これは後漢末

から西晋というエポックに生きた士人、著者によれば「世説新語人」の生活態度とその歴史性を、「世説新語」の中にみようとしたものである。著者によれば清談の生活態度の中心は、形骸化した後漢の禮教に反對した眞の人間性の追求にあったから、從來いわれてきたような頽廢ではなくて健康であり、道家思想にもとづくというよりも、道家的立場とともに儒教的立場をもふくんで深化したものであり、國家と政治に對して、自律性と人間性を昂めたものであった。この章については、著者自身あとがきで、「夫子自身の願望をえがいたものにすぎない、との非難はさけられぬ」とのべているが、しかしこの章にあらわれた見解は、著者の構想のもっとも重要な部分の一つであつて、逆にいえばもっとも著者らしい研究だと思われる。

X X X X X

以上の紹介と、本書の章だてそのものをみてもらえば、著者の構想はほぼ明かとなったであらう。そこで最後にまわした第二章を簡単に紹介しつつ、のこしておいたごく大雑把なわたくしの疑問點をあげておきたい。

著者によれば、秦漢古代帝國の成立は、松本光雄氏などによつて解明されつつある一種の都市國家、著者のいわゆる「邑制國家」と、その基礎にある氏族制（小宗の大家族制）社會を前提とする。この氏族は春秋中期より三族制家族に分裂してゆき、こゝに廣汎に形成された「新しい民」の層は、早熟な君主・官僚制國家——戰國國家の基礎として組織された。新しい民の主體は獨立的な一般農民、商工民層であつたが、やがてこの中から「士」の階層が分化しはじめ、官僚層の母體となる。この君主・官僚制の理論的武器となつたのは法家思想であるが、これに對して儒學は、自由農民層以上の人々の

現實の家族生活から生れたモラル、根本は人間性の平等觀に立つ精神にもとづくもので、この人間原理が、個人から家族・鄉村・國家そして世界へと擴大されてゆくものであつた。漢帝國は秦の法家主義をうけつぐとともに、民衆から働きかけるもの——儒家の聲をうけ入れて、これを一にした。帝國構成の一方の極に天子があり、他方の極にある民がこれを支持し、かれらのあるものは、民衆のモラルを提げて官僚となり、民衆のモラルを反映した法によつて行政を執行した。儒家的——法家的國家が、このような社會的・精神的構造において形成されていった。

しかし儒學が公羊學という、帝國政治のための歴史哲學として現われ、地主・豪族がこの儒學で官僚界を獨占するようになると、帝權は相對的に弱体化してゆき、法と行政は儒學的禮樂主義に止揚せられることによつて、非能率・無責任化し、禮樂は迷信と混合して俗流化し、形式化し、無氣力になつていった。一方豪族は一の階層を形成しつつ、同族の勢力と經濟力、政治力によつて貧農を壓迫して下戸とし、莊園經濟を通して市場をにぎり、帝國の基礎たる民の層を分解させ、黃巾の亂による政治の混亂とともに自ら武力的集團を形成して、帝國崩壞とともに新しい社會を形成していった。

さてこゝでわたくしは、こまかい點はさておき、大まかな二三の點について疑問を提出したい。まず第一は、春秋戰國の動亂をつらぬく儒家的——法家的國家の形成過程と構造についてである。つきつめて言つて著者によれば、漢帝國はその精神的構造において成立していると言わざるをえない。天子はかれ以外のすべての平等な人民を、個々につかんで帝國につなぐ。こゝでは官僚は支配のために結合した階級ではないから、天子を天子たらしめるものは、民の支持

と忠誠心以外にはない。そしてその支持をつちかっているものが、民のモラルたる儒學なのである。ところで人間生活に根ざす家族倫理の存在を否定することはできない。けれどもそれを哲學化し、政治理論化し、法に反映せしめた儒學は、はたしてそのまゝ、當時の「民衆の聲」であつたらうか。もっぱら士官僚となるべき目的で形成された儒學の徒が、秦の支配に反對してたかつたとしても、そのことと、「かくして儒學の徒の聲はそのまゝ、民衆の聲であつた」とすることの間にギャップがあるのではなからうか。しかも國家は、たとえ儒學によそわれたとしても、やはり法家的支配を必要としていた。こゝでわたしは、冒頭でふれた著者のヒューマニズムに關する疑點を想起するのである。ではその法家的官僚制支配はどうであるか。著者は階級としての士階層の分化にふれ、それは經濟的には自作の自由農民と、「それ以下の農民」の分化を意味したという。この「それ以下」というのが判然としないが、もしこれが土地の喪失したかという意味ならば、その母體がそもそも自由農民層を主體とする「新しい民」なのだから、當然他方にかれらを吸収する地主の成長が考えられるはずなのだが、この段階では地主のことはのべられていない。また土地喪失というのでないのなら、この「階級として」の分化は、「經濟的」には、その母体とどういふ關係になるのだろうか。また士が「學問と個人的修養と、官僚としての俸給生活だけを目的とする」もののであれば、邑制國家ですでに發生してゐたと思われる階級支配は、君主一人をのそいで消滅してしまうのだろうか。

疑問の第二點は、帝國支配の内部に成長してくる豪族についてである。第一、豪族を帝國支配の矛盾物とする著者の規定が、帝國の

構造に關する上述の疑問とむすびついてくるのだが、第二にその上家下戸制という生産構造と奴隸制・小作制經營の分析については、學界に大きな反響をよび、濱口重國氏（中國史上の古代社會問題に關する覺書、山梨大學學藝學部研究報告四）、天野元之助氏（中國古代史家の諸説を評す、歴史學研究一八〇號）らの批判が明かにされており、また前掲五井氏の書評も主力をこゝにそゝいでいるので、こゝにくりかえす必要はないと思う。要するに著者の數量的計算にしたがつても、奴隸制は小作制よりはるかに有利であり、他方では「容易にドレイ化する階級」として貧農層が没落の波にたえずあらわれていたし、さらに豪族は強大な經濟力のみならず政治力を有していたのだが、にもかかわらず奴隸制が發達しなかつたことを、奴隸の財産評價額や、純粹に經濟的な賣買價格の高さからのみ説明することはできないであらう。著者のような歴史家が、この種の問題を、歴史的・社會的條件を捨象した純粹な經濟的・數量的な關係に還元してしまうことは納得できない。奴隸制が制約されたとすれば、その條件は漢代農村社會の經濟的な條件、あるいは政治的・社會的な關係などからも考察されねばならぬし、そこにおいて豪族の内部で奴隸制とからみあつて存在したと思われる小作制の歴史的 성격も明かとなるであらう。この點に關するわたしの考えは、拙稿（漢代土地所有制について、大阪市大經濟學年報五）でものべておいたが、むしろこゝで注目しなければならぬのは、このような生産構造の理解が、著者にあつては、さきの漢帝國の精神的構造や儒學についての考え、そして「僮約」という文學作品的社會的性格の分析につながっていることである。こゝから、奴隸にみうりしたものの仕事の内容について、奴隸は發言權と承認權を法的論理としても

つ、という假定が導かれてくるのだが、これは奴隸の本質からみて、いささか飛躍をふくんだ假定と思われる。この假定はもつと普通に形成されつつあった奴隸使用についての社會通念やならわしにおきかえることもでき、證文に對する奴隸の自署は、たとえこれをみとめるとしても、仁井田陞氏の指摘された儒學における人間尊重主義の本質、あるいは中國における自賣奴隸の問題と關連させてとけるのではなからうか。つまり著者は、漢代の奴隸のすがたにヒューマンなものをみだし、そこから漢代社會の基本的な性格をも規定しようとしているのであるが、それは一面では奴隸の本質にたいする若干の飛躍的な假定をふくみ、他面では、奴隸制社會にかんする理解において、ギリシア・ローマの古典的なすがたをつよく意識しすぎてゐるのではないか、と思われる。もちろんここで提出されたゆたかな問題は、今後の研究の發展に重要な役割をはたすであらう。

最後に、本書における經濟的計算の問題は、中國古文獻の數的資料のいくつかの矛盾や、現實性に關する疑點からみて、なお多くの問題をふくんでゐる。とくに假說的數値をもとした演繹や乗除となると、全くその感がつよい。それ故批判も多く、數學的誤謬をのぞ

いても、第一これらの中の基礎資料たる李悝の説については藤井氏が、武帝の地畝改制については、濱口、天野兩氏が反論しており、これは農民家計、畝の實面積、畝當り平均收量から都市人口推計など、あらゆる面に決定的な影響を與えるものであるから、今後の諸先學の考究をまたねばならぬ。

本書をよんでつよく感じたことは、著者の視角が社會經濟史のせまい枠にとじこもらず、「廣い意味での文化」史にあるのだということであつた。そこからあてられた照明は、生命を喪失した構造論ではつかめない歴史の具體的な映像をうかび上らせたが、この映像をもつと全體的な正しいものにすることが望まれ、そのためにはさらに異つた視角から多くの研究者の協力を必要とするであらう。この紹介もこうしたねがいの一のあらわれにすぎないが、それだけに著者のユニークな、そして優れた業績に對して、わたくしの紹介や問題提出のしかたは、無難でかつあやまっていけないか、ふかくおそれている。また日頃親しく教えをうけている間柄にあまえて、非禮にあたつた點が少くないとすれば、最後にふかくおわびしたい。

(河地重造)